

ザルツブルグ音楽祭から世界へ発信した「日本」

中東生

2013年10月01日

ソーシャルリンクをとばして、このページの本文エリアへ

2013年8月25日ザルツブルグ音楽祭の今年のテーマは「仏教・神道の音楽」。これに呼応して、アジアを代表して選ばれたNHK交響楽団のコンサートがフェルゼンライトシュレー（岩窟乗馬学校）で開かれた。丁度、福島第一原発からの高濃度汚染水流出がメディアで取り沙汰されたことも重なり、音楽祭が細川俊夫氏に委嘱した新曲が、津波の被害者からインスピレーションを得た作品だと分かると、現地の新聞もこぞってフクシマと結びつけた記事を掲載して話題を集めた。

ザルツブルグは世界遺産に登録されている美しい街で、モーツァルトの故郷として知られている。1842年からモーツァルト音楽祭が開かれており、それを母体にしたザルツブルグ音楽祭は現在、世界中から訪れる避暑客の集まる世界屈指の音楽祭として認知されている。また、コンサート会場になったフェルゼンライトシュレーは映画『サウンド・オブ・ミュージック』でトラップ大佐一家が出場した歌唱コンクールの舞台になった場所であり、クラシック音楽に興味のない旅行者も訪れるという。この地から現在の「日本」を発信するということ自体、意義ある事だと言えよう。

アカデミー賞を思わせる赤絨毯が敷かれたフェルゼンライトシュレーのエントランスは、着飾った聴衆がタクシーから降り立ち、社交場と化していた。賑わうフォワイエを通過して会場に入ると、客席1420席の場内には空席も目立った。やはりアジアへの関心はこの程度なのだろうか。しかし満席にはならなくとも、ベルリンフィルを率いてザルツブルグ入りしているサイモン・ラトルをはじめ、豪勢な顔ぶれが観客席に揃っていた。



写真：Wolfgang Lienbacher

武満徹の『ノヴェンバー・ステップス』が始まると、一列後ろから回りを憚らない話し声が聞こえた。他の聴衆に注意されても、その雑音は繰り返され、そのうちに笑い声に変わった。笙と琵琶の、和楽器独特の演奏の仕方が笑いを誘うと言いたげだ。「外国人の目から見てみると滑稽なのかもしれない」と、日本人でありながら、日本文化に敬意が払われることをあきらめかけた瞬間、回りの空気の変化に気付いた。尺八奏者の柿塚香氏と琵琶奏者の中村鶴城氏は、そのようなざわめきをもものともせず、西洋の楽器ではあり得ないような、「無我の境地」の集中力を長い間持続させ、かつどんどん高揚させ、最後には会場中の聴衆の琴線に触れたのだった。これこそ「日本」の力ではないか。

細川俊夫の『嘆き』は、オーケストラが表現する海を背景に、ザルツブルグ生まれの詩人トラークルの詩と、彼が自殺する直前の手紙から完成させた歌詞を、ソプラノのアンナ・プロハスカが唱えるように朗読し、それが自然に歌に変わっていく。その海の姿は、暗く、深く、巨大で、荒れやすく、とても人間の手におえるような存在ではないことが再認識させられる。自然への畏敬の念を、「神が世界を6日間で作った」とするキリスト教徒よりも深く抱いている仏教・神道観が、ここにも感じられた。

「ザルツブルグ音楽祭委嘱作品」という性質から、すぐにこの『嘆き』を日本で披露することは難しいだろう」と細川氏は予測するが、いつの日かそれが実現した時、この曲によって被害者の悲しみが昇華されるのだろうか。細川氏がインタビューで語ってくれたように「悲しみは、それを美しく演じることによって浄化作用がある」「悲しみを溶かし、カタルシスを喚起することができる」ことを心から願うしかない。

『嘆き』が示した、私達人類が将来進むべき方向は、誰にでも感じ取れたはずだ。海はこれだけ壮大だ。地震を起こすプレートも、火山も全て、自然は人間がコントロールできるものではない。人間がコントロールできるのは、自分達の行動だけだ。危険な物は作らない、自然を破壊しない、驕らない、それだけだ。そのような、シンプルだが普遍の事実を伝えることのできる音楽というものの偉大な力を見た。

後半はベルリオーズ作曲『幻想交響曲』で、N響の実力を知らしめた。この曲はベルリオーズが失恋した自分をモデルに書いた、恋に身を焦がす男が見た夢の物語で、夢の中で彼は片思いの女性を殺してしまい、ギロチンで処刑され、堕ちた地獄の描写までが音楽でなされている。それを実に軽やかに、柔軟に、切なく、ロマンチックに、そしてドラマチックに演奏したN響と指揮のシャルル・デュトワは大喝采を浴びた。アンコールもフランス音楽に徹し、ビゼー作曲『アルルの女』組曲第二番「ファランドール」で締めくくった。

これからの日本が向かうべき方向が象徴されたような演奏だった。

日本は素晴らしい独自の文化を持っている。そして外来文化を再現する実力もここまで身につけた。もう他に憧れ、「追いつけ、追い越せ」と競うことから卒業できるのではないか。内に秘めた日本人の強さを信じ、豊かさよりも平和を尊ぶ生き方、これこそ日本人に相応しい在り方なのではないか、と考えさせられる哲学的なコンサートだった。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.